

【一】 次の文章を読み後の問いに答えなさい。

今の自分にどこか納得がいかない

「こんな自分、イヤだ」

そんな思いが込み上げてくることがあるだろう。だれにでもあることだ。今の自分にA納得がいかない。

小さい頃は、¹「そんなこと」はあまり思わなかったはずだ。もちろん、^B「ニガテ」なことはあっただろう。

A、球技がニガテだなど思ったり、引っ込み思案で友だちづきあいが下手な自分を意識したりすることもあっただろう。でも、自分が嫌いだとか、自分がイヤだなんて思うことはあまりなかった。

B、最近では、「自分がイヤだ」と思う。青年期になると、そんな思いを抱きがちだ。

【一】

自分がイヤだと思うようになるのは、自分がだらしなくなったとか、ダメになってきたということではない。^C「^a見られている自分」がダメになってきたのではなくて、「^b見ている自分」が成熟してきたのだ。自分自身を厳しい目で見るようになったために、自分の現状に納得できなくなったというわけだ。

【二】

²ある意識調査によれば、小学五年生に「自分のことが好きか」と尋ねると、半数以上が「好き」と答える。「嫌い」というのは一割にも満たない。だが、中学三年生では、「好き」が三割程度に減り、「嫌い」が二割に増える。同じく小学五年生に「自分に満足か」と尋ねると、半数以上が「満足」と答え、「不満」というのは一割に満たない。ところが、中学三年生では、「満足」が二割と大幅に減り、「不満」が半数近くになる。

【三】

このことは、まさに自分を見る目が厳しくなってきたことの証拠といえる。自分に対する要求水準が高まるため、なかなか自分の現状に納得できないのだ。

【四】

理想自己を意識するようになる

ただ何となく生きていたのが児童期だとすると、青年期になると「こうありたい自分」というものを意識するようになる。それを「理想自己」という。現実の自分を「現実自己」という。児童期には現実自己をただひたすら生きていた。ところが、青年期になると、理想自己というものを思い描くようになり、現実自己を理想自己と比較するようになる。そこで、理想自己にまだまだ届かない現実の自分を意識せざるを得ないため、自分に満足しにくくなるというわけだ。

理想自己の形成には、青年期になると抽象的思考ができるようになることが関係している。そのため、具体的な行動と結びついた理想自己だけでなく、抽象的な価値観と結びついて理想自己ももつようになる。

たとえば、「日曜日は野球をして遊びたい」「サッカーがもっと上手になりたい」「テストでもっと良

い成績が取れるようになりたい」というような^X「^Y的な目標をもつだけでなく、「もっと自分に自信がもてるようになりたい」「こんな退屈な日々から脱出したい」「自分が生きてるっていう実感がほしい」などといった抽象的な目標を意識するようになる。

具体的な目標と違って、このような抽象的な目標になると、その達成のためにどうしたらよいのかわからない。

日曜日に野球をして遊びたいというのであれば、ふだん野球と一緒にしている仲間と声をかければよい。サッカーがもっと上手になりたいのなら、時間をつくって練習に励めばいい。いきなり上手になるわけではないけれど、練習をすればするほど少しずつでも上達していくはずだ。テストでもっと良い成績を取りたいなら、試験勉強をしっかりとやればよい。すぐに報われるとは限らないが、^C地道に勉強することができれば、^D「チャクジツ」に成績は向上していくだろう。このように、具体的目標の場合は、そのために頑張るべき方向性は明確だ。

抽象的な目標の場合はどうだろう。もっと自分に自信がもてるようになるためには、いったいどうすべきなのか。退屈な日々から脱するため、できることって何だろう。生きているっていう実感を得るために、果たして何をすべきなのか。いくら考えても、なかなか答えは見つからない。

今の自分にどこか納得がいかない。でも、どうすればよいのかわからない。ここに産みの苦しみがあ。³第二の誕生という課題を前にして、どんな自分になったら納得できるのかわ見えてこない。

D、ますます自分が気になってくる。

そんな不快感を抱えた状態は、けっして気分の良いものではない。方向性を見つけて、こんな苦しい状態から何とか脱したい、早くスッキリしたいと思うかもしれない。でも、⁴今の自分に納得がいかないからといって、自分を否定する必要はない。

自己の二重性を思い出してみよう。「見られている自分」に対して納得のいかない「見ている自分」がいるわけだ。その「見ている自分」は適当に流されている自分にも不満をもたなかった以前の自分と比べて、はるかに向上心に満ちた自分と言えるだろう。そんな自分は、けっして否定すべきものではない。むしろ肯定し、応援すべきなのではないだろうか。

『自分らしさ』って何だろう？ 自分と向き合う心理学』榎本博明

問一 二重傍線部A「納得」、C「地道」、の読み方をひらがなで記し、B「ニガテ」、D「チャクジツ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 空欄A、Dにそれぞれあてはまる語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使ってはいいけません)

A そこで イ たとえば ウ 言ってみれば エ それなのに

問三 傍線部1「そんなこと」とはどのようなことか。文中より九字で取り出しなさい。ただし、句読点も字数とします。

問四 傍線部2「ある意識調査」とあるが、それはどのような調査か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 小学五年生に対して、物事の好き嫌いを調べて原因を考察したもの。

イ 中学生に対して、物事の好き嫌いを調べて原因を考察したもの。

ウ 児童期と青年期の子供たちにとって不満に感じるものの内容を調べたもの。

エ 児童期と青年期の子供たちの自分に対する満足度を調べたもの。

オ 児童期と青年期の子供たちの意識傾向から見える日本社会の問題を調べたもの。

問五 次の一文を入れる場合、最適な場所はどこか。【Ⅰ】～【Ⅳ】から選び、記号で答えなさい。

《脱文》

このように、児童期には自分が好きで自分に満足していたのに、青年期になるにつれて、自分が嫌いという人が増え、自分に不満という人が急激に増えていく。

問六 空欄 X にふさわしい語を文中から二字で取り出し答えなさい。

問七 傍線部3「第二の誕生」とあるが、この語句の説明となっている次の文章の空欄①・②に最も適切な語をそれぞれ四字で入れなさい。

児童期の①から青年期の②に生まれ変わることを。

問八 傍線部4「今の自分に納得がいけないからといって、自分を否定する必要はない」と筆者が言うのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア そもそも自己とは二面性を持った存在であり、自己を肯定したり否定したりを繰り返すのが当たり前だから。

イ 今の自分に納得がいなくても、それについて考えていくうちに必ず解決方法を見出すことができるから。

ウ 情報化社会では、絶えず新しいことが求められ、ついていくことが困難なので、そんな自分を誰でも否定しているから。

エ 抽象的な目標は解決すること自体が無理で、スッキリしたいと願ってもうまくいかないの、悩む意味がないから。

オ 納得がいけないのは、なんとなく生きていた児童期に比べると、向上心を持った自分に成長したからと言えるから。

問九 傍線部a「見られている自分」とb「見ている自分」の二つの自分が存在することを別の言葉で表現している箇所がある。それを文中から六字で取り出しなさい。

問十 次の文の中で正しいものには○、間違っているものには×を解答用紙に書きなさい。ただし、す

べて同じ記号で答えた場合は採点の対象としない。

ア 青年期に自分がイヤだと思うようになるのは、他者からの視点を意識し、比較することで自信を失うからである。

イ 青年期になると、自分に対する要求水準が上がり、現実の自分からこうありたい自分を求めるようになる。

ウ 青年期は自分に納得できない気持ちになり、苦しい思いをするが、そんな自分を否定すべきではない。

エ 青年期は抽象的思考ができるようになり、抽象的な価値観を大切にする反面、具体的行動を否定するようになる。

オ 青年期は次第に短時間で多くの問題解決を求められるようになり、できないことが増えていくのはやむをえない。

二 次の文章を読み後の問いに答えなさい。

次の日の夕方、おばちゃんの家に向かった。

坂道をのぼったところで、マグノリアの木が目にとびこんできた。

おばちゃんの家から道路まで根をのばし、アスファルトのところどころ持ちあげているような古くて大きな木だ。ちょうど家の角にあるから、おとなりとの境界線に面している。

となりの方向にのびていた枝ははらわれ、すっかりさびしくなってしまった。

そうまでしたのにやっぱり切られちゃうなんて。

歩くうち、木がちやうど夕陽をさえぎる位置になった、枝と葉のあいだから射す何本もの光のすじは、十字架の形に輝いた。

道路側のA幹に人がもたれるように立っている。

【かすかな歌声がきこえた。どうしてこんなところで歌っているのだろう。逆光の中で目を細めて見てどきりとした。もつれた髪は下におりずに上できまき、空に向かって高くかかげた両腕は葉っぱとからまりあっている。そして、足のひざから下が木の中にうもれている。

髪をさか立てた人がマグノリアの木から生えて悲しげな歌を口ずさんでいる。】

あたしはその場に立ちすくんだ。

夕陽が雲のあいだにかくれた。すると、歌声もやみ、人に見えたのは太い幹で、顔と思ったのは切り落とされたこずえの白い切り口だとわかった。かかげた腕はただの枝だし、歌はさわさわと鳴る葉ずれの音にちがいはなかった。

あたりはうす暗くなっていた。

昼でも夜でもない時間、陽がすっかりしずむまでのほんのいつとき、それは異界との境が薄れ、この世のものでないものに出会うころだという。

あの一瞬見た人のすがたは X の精だったのかもしれない。もうすぐ切られるとわかって悲し

い歌を歌っていたのかもしれない。

枝の下を足早に通りぬけて、げんかんの前に立った。

まだあかりもついていない家の中の暗がりから、おばちゃんはひっそりとあらわれた。

「おや、灯子どうしたの」と言うのを押しのけるようにあがりこむと、^Bカッテにパチパチと電灯をつけた。

「おばちゃん、暗いよ。家庭は明るくしとかないといけないんだよ」

「どういけないの？」

「暗い家に育つと、グレたり、非行に走ったりするらしいよ」

「あら困ったわ。でも、だれが」

猫のムンクが足もとにからんできた。

「猫とか、庭の木とかが」

「それはたいへん」おばちゃんはムンクをかかえあげ、「いい子でいてね」ほおずりしながらろうかを歩きはじめた。

おばちゃんはまるで地に足がついていないような^Aとした歩き方をする。あとをついていくうちに、不安になってきた。おばちゃんは色が白いうえに、このところ髪にも白髪が多くなった。白っぽいおばちゃんが、白いかべにふうと消えてなくなりそうな気がしてきたのだ。

あたしは思わずおばちゃんのひじをつかんでしまった。

「え？」

おばちゃんがふりかえったので、あわててつつみをさしだした。

「パパからおみやげ。はい、毒フグ」

「まあうれしい」おばちゃんがつつみを受けとろうとしたとき、ムンクが魚のにおいに気づいたのか、腕の中からとびおりた。そして、よからぬ顔つきでおばちゃんの手もとを見上げた。

「ほら、フグをねらってる。もうりっぱな非行猫だよ」

あたしは足先でムンクを^Bとつついてやった。ムンクはニヤアと怒ってみせた。

居間でお茶をひとくちすすって顔をあげた。

「おばちゃん、¹悪いおとなりさん²のことなんて気にしちゃだめだよ」はげますつもりだった。「生徒のおばさんたちも、ウソをついてやめちゃったんだってね。これからは来る人だれでも入れるんじゃないって、ちゃんといい人と悪い人のくべつをつけて入れなきゃだめだよ」

「灯子にまで心配かけちゃったみたいね」おばちゃんはクッキーをお皿に並べた。

「でも、いい人と悪い人のくべつなんてどうやってつけるの？」

「見たらわかるじゃない。あのおばさんたちだつてうるさくて感じ悪かったもの、さいしょから」

「あのね、人間って、いい人と悪い人とどっちかに分かれているわけじゃないの。²いいところと悪いところとまだらになつていいるものなのよ」

「まだら？」

「そう。まだら模様。白いところと黒いところとまざりあつて」こんなふうに、と言って、おばちゃんはマーブルクッキーをあたしの目の前に持ってきた。

そのときムンクがおばちゃんのひざにとびのつた。

「そうそう。この子みたいに」

ムンクは白と黒のブチ猫だった。

「そうかな？　こんど引越してきたつていうおとなりさん、木を切れなんて、やつぱり悪いやつだよ」

あたしはマーブルではなく、チョコ味のクッキーをつまみあげた。「悪いやつだから、ぜーんぶ黒いんだよ」

「灯子ったら、よく知りもしないのに」

おばちゃんは人の悪口を言わない。パパは³そこがおばちゃんのよいところだと言う。ママはそこがよくないところだつて言う。言ったらそれですっきりするのにな、だつて。

ひざの上でムンクがおばちゃんの顔を見上げていた。

ムンクはおじちゃんがまだ生きていたころにやってきたまよい猫だった。

ひげが上にそり返っている有名な画家に似ていたんだつて。ダリつていう名だったのに、おじちゃんはその画家の名前をムンクつておぼえていた。まちがいに気づいたときにはムンクはすっかりムンクになっていた。獣医さんの話では十五歳はすぎているということだからあたしより年上つてことになる。いつネコマタという妖怪に^Cシンカするか楽しみになっているけれど今のところ化けるようすはぜんぜんなく、家にいるときは一日だらしくねそべっている。

「お魚、あとでおばちゃんがくれるつてさ」

おばちゃんのひざからだきあげようと手を出したら^Cと逃げ、そのまま庭に行つてしまった。

「あいかわらずお外が好きなんだ」ムンクはすぐにどこかに行つてしまう。夜になつても帰らずにおばちゃんを心配させることがたびたびあった。

「そうなの。でもさいきんはあまり遠くに行かないの。あそこにいることが多いのよ」

ムンクは庭のマグノリアの根元でからだをなげだした。前足をのびして顔をあげ、⁴まるでスフィンクスみたいなかつこうだ。

「木守りのつもりかしら」

「ねえ、やつぱりあの木、切らなきゃだめなの？」

湯のみを両手につつんでおばちゃんは答えた。「ええ。そうしようと思つて。虫もつくし、葉っぱの^Dシマツもたいへんだし、わたしもちよつとしんどくなつてたのよ」

それもほんとうかもしれない。でも、おばちゃんは自分に言いかけようとしているみたいだった。

「だから、切るのにはいい機会かもしれないと思つて」

「古い木なのに、ね」

あたしのことばにおばちゃんは顔をあげた。

「そう、古い木なの。おじちゃんが大事にしてた木なの」

「おじちゃんかあ」

あたしはチェストの上にかざつてあるおじちゃんの写真をながめた。

*生徒のおばさんたち：「おばちゃん」は書道教室をしている。そこで教えていた生徒たちの事。

『夕暮れのマグノリア』安東きみえ

問一 二重傍線部 A「幹」の読み方をひらがなで記し、B「カッテ」、C「シンカ」、D「シマツ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 空欄 A 〽 C にそれぞれあてはまる語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使ってはいけません)

ア ちよん イ するり ウ ふわふわ

問三 一 で囲んだ部分の描写について、「あたし」がこのように見たものの実際の正体は何だったのか。それが書いてある形式段落を取り出し、始めと終わりの五字で答えなさい。ただし、句読点も字数とします。

問四 空欄 X にふさわしい語を文中から一字で取り出し答えなさい。

問五 傍線部 1「悪いおとなりさん」とあるが、この「おとなりさん」はどのようなことをすると考えられるか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ウソについて「おばちゃん」の書道教室をやめてしまう。
イ となりから歌をうたつていやがらせをする。
ウ グレたり非行に走るような行動をくりかえす。
エ マグノリアの木を切るようにせまってくる。
オ マグノリアの木にもたれ、家の様子を観察する。

問六 傍線部 2「いいところと悪いところとまだらになっている」ことを「あたし」にわかりやすく説明するために「おばちゃん」が例としてあげたものを二つ、文中から八字と七字で取り出しなさい。

問七 傍線部 3「そこ」の指す内容を文中から九字の語句で次の空欄に入るように答えなさい。

〃 こと。

問八 傍線部 4「まるでスフィンクスみたいな」とあるが、この表現は次のどれにあてはまるか。記号で答えなさい。

ア 体言止め イ 倒置法 ウ 直喩 エ 隠喩 オ 反復法

問九 次の「おばちゃん」についての説明として正しいものには○、間違っているものには×を解答用紙に書きなさい。ただし、すべて同じ記号で答えた場合は採点の対象としない。

ア 夫はすでになくなっており、娘との二人暮らしである。
イ ユーモアのセンスがあり、物事を深く考える人でもある。
ウ 自分の考え方にこだわり、人の意見には耳をかそうとしない。

エ 夫との思い出がつまった木を切つて悲しみを忘れてしまいたいと思っている。
オ おとなりとの関係を気に病んでおり、自分ががまんすることを選ぼうとしている。

《以下 余白》

受験番号

氏 名

氏 名

総合得点

総合得点

一

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十
A	A					①			ア
B	B								イ
C	C								ウ
C	D					②			エ
D									オ

一 合計

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九
A	A							ア
B	B							イ
C	C							ウ
C								エ
D								オ

二 合計

こと。

【七字】

【八字】